

平成 23 年 6 月 23 日現在

機関番号：44105

研究種目：H21 若手研究（スタートアップ）→ H22 研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21830169

研究課題名（和文）保育者養成段階における保育実践力の向上に関する実証的研究

研究課題名（英文）The Empirical Research on the Improvement of the Practical Ability of Early Childhood Care and Education in the Training Stages for Kindergarten and Nursery Teachers

研究代表者

上村 晶（UEMURA AKI）

高田短期大学 子ども学科 助教

研究者番号：60552594

研究成果の概要（和文）：本研究は、視聴覚教材を活用した子ども理解の深化と省察プロセスの体得を目指した取組を保育者養成段階において実施し、見とり力と即応力の向上に関する有効性を実証的に究明することを目的とした。その結果、視聴覚教材を有効的に活用することで子どもの内面推測が可能になり、見とりに応じた援助・遊びの考案が可能になること、仲間と協同的に語り合うことを通じて省察プロセスの体得が可能になることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to demonstrate the improvement of the students' ability of insight into individual child and their ability to cope with each situation of each child by introducing the practices with audiovisual aids, which aim to deepen the understanding of child and to acquire the process of reflection, to students in the training stages for kindergarten and nursery teachers. It was suggested that audiovisual aids help students understand the inside of each child, then that enables them to device and to develop various ways of support and play for children. And it was pointed out that talking with other students about what they noticed about children by using audiovisual aids is effective to acquire the process of reflection.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	730,000	219,000	949,000
平成 22 年度	510,000	153,000	663,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,240,000	372,000	1,612,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学 4001 幼児教育・保育

キーワード：保育実践力 保育者養成 省察 子ども理解

## 1. 研究開始当初の背景

保育所保育指針や幼稚園教育要領の改訂を経た現在、社会から求められる保育者の資

質や専門性の在り方は見直されつつある。その上で、次世代の保育環境に対応できる保育実践力のある保育者を育成し輩出すること

は、保育者養成校に求められる課題である。

この保育実践力の定義に関して概観すると、文部科学省（1997）は教育職員養成審議会において「実践的指導力」という表現を用いて、保育者養成段階において実践的指導力の基礎を培うことを重視している。また、幼稚園新規採用教員研修資料（文科省、2004）においても、幼児の言動を受けとめ、様々な事象に応じて適切に援助・対応できる実践的指導力の重要性が示されている。さらに、関連の研究を概観すると、保育実践力の構成因として「生活や遊びの観察分析」「計画立案の技能」「援助過程における創意工夫」「実践を評価記録する知識技能」や、「指導計画力」「指導展開力」「共感的指導力」「省察的指導力」などが見出されているほか（腰川、2006/木村・橋川、2008）、保育実践力の定義として「保育案の作成能力」「実践する技術力」「保育実践し反省して課題を見出す力」が示されている（松山、2010）。以上の見解を総括した結果、本研究では、保育を展開する際に必要な子どもの育ちを見つめ理解する力（①見とり力）、見とりに即して手立てを考案し、実践・展開する力（②即応力）、実践を省察し課題を見出す力（③省察力）の3点を重要な柱として定義づけた。

このような見解を踏まえた上で、養成段階にある近年の保育学生に着目すると、保育指導案を上手く書くことや活動を立案通りに滞りなく進めることに意識が傾くことが多く、子どもの見とりの未熟さ（子どもの姿の予想が乏しい・発達過程や内面理解の理解不足）や、即応力の欠如（予想外の子どもの反応に戸惑う・子どもの状況に応じて対応する力が乏しい）などの課題が実習場面において挙げられている。また、ビデオカンファレンスなどで省察の機会を設けた際も、保育者の援助の在り方や活動展開に意識が向く傾向が見られ、子どもの内面理解にまで至ることが難しいなどの知見が得られている（上村、2009/2010）。よって、これらの力量形成を目指す際の基盤として、その時々の子どもの心情や実態を見つめて洞察していくこと、すなわち「子ども理解の深化」が不可欠であると考えられる。

このような個々の見とりや保育の見方・深め方に着目すると、森上（1998）は、予測が当たるように立案・実践が出来ることよりも保育を実践する上で状況全体が示す重大な

“意味”や“出来事”の相互関係が見える視野の広さが重要であると指摘している。また、児嶋ら（2001）は、保育者自身が保育実践を振り返る中で課題を発見し改善しながら向上させていくプロセスを持ち得ることの重要性を示唆している。また、海外の研究に着目すると、保育者は自らの保育を省察し続けながら実践を深めていく姿勢、すなわち Schön.D（1983）によって提唱された「反省的実践家」という概念が重視されている。同様に、Vander Ven（1988）が提唱した「保育者の成長モデル」では、新任当初は構造的に保育を捉えることが難しく単線型思考であるが、経験を重ねるにつれて一つの事象に対して複数の可能性から保育を捉えることが出来るようになり複線型思考へと発展することを示唆している。つまり、保育実践力を高める上で、保育そのものを捉える際に多角的な観点から省察し、その意味を考え深めていく思考の道筋、すなわち「省察プロセスの体得」が重要であると考えられる。

以上の経緯を踏まると、保育者養成段階における保育実践力の向上を図るためには、学生が「保育の根幹は子ども理解であること」を再認識できるよう、①子ども理解を更に深める取組と、②省察するプロセスを体得する取組を重点的に実施する必要があると考えられる。これらを具現化する新たな視点として、視聴覚教材を用いた2つの取組を本研究の柱として考えた。

#### (1) 子ども理解を深める取組

##### ①“VTR stop 省察法”による見とり力の向上（保育映像を活用）

子どもの姿に焦点を当てた VTR をある場面で一時停止することで、子どもの内面を推測し、見とり力の向上を図る。また、保育者の立場からどのようなねらいを持って援助するかを考え、具体的な手立てを語り合う中で省察を深める。同時に、静止後の保育映像を再視聴することで自身の保育の枠組みに気づき、捉え直すことを目的とする。

##### ②“遊び考案法”による即応力の向上（オリジナルの音楽素材を活用）

保育映像を視聴後、実習でかかわった子どもの実態を語り合った後に、音楽素材を試聴し、子どもの姿を想起しながら実態に応じた遊びの協同考案を通じて、即応力の向上を図る。また、保育者の立場からどのようなねらいを持って遊びを展開するかを考え、実践及

び具体的な手立てを即時的に発表する。

## (2) 省察するプロセスを体得する取組

### ①“模擬保育”による即応力の向上（ビデオカメラを活用）

子どもの姿を想定しながら立案・実践（参加）する模擬保育を実践し、保育現場を想起した活動を展開することで即応力の向上を図る。

### ②“模擬保育ビデオカンファレンス”による見とり力の向上（模擬保育 VTR を活用）

模擬保育映像を活用して抽出児に焦点を当てた“VTR stop 省察法”を実施し、即時フィードバックを図ると同時に、抽出児の内面理解を深め、見とり力の向上を図る。

上記の取組に視聴覚教材を導入した背景として、ビデオ映像が持つ有効性はとても大きく VTR を見ることで自分の保育を変える契機になりうるという大豆生田（1996）の見解や、VTR を用いて学生が自分の保育を再現する中で自己の行動を解釈しその意味づけを明らかにする必要性があるという金子（2007）の見解に基づき考案した。実際の保育現場においては、2 度と同じような事象が繰り返されることはないため、即時的な見とりと行動が求められる。よって、1 回の映像を丁寧に見つめたり VTR の一時停止機能を活用したりすることで、学生自身の見とり力の向上が期待できると考えられる。同様に、音楽素材を導入した背景としては、多くの保育実践や保育技術は子どもの実態に即して変容させていくことが望まれるため、音楽素材を活用しながら子どもの実態に応じた遊びの考案を通して、子ども理解を基本とした即応力の向上が期待できると考える。さらに、模擬保育に関しては、小学校などの模擬授業とは構造的に質が異なるためその研究数は少ないが、ビデオカンファレンスと並行して実施することで、学生が保育を見つめる観点の変容を図り保育を細かく読み解く力量を培うことが期待できると考える。保育者養成段階において学生が自らの実践を視聴覚教材によって省察する研究は数少ないため、学生が仲間と協同的に学びを深めながら実践力の向上を図るための一助として活用することの効果をも明らかにしたいと考えた。

## 2. 研究の目的

そこで、本研究では、視聴覚教材を有効的に活用した子ども理解の深化と省察プロセ

スの体得を目指した取組を保育者養成段階における 2 年間の縦断的研究として実施し、学生の学びの概要と見とり力及び即応力の向上に関する有効性について実証的に究明することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査対象

A 短期大学子ども学科

平成 21 年度入学生：157 名

### (2) 調査実施期間

平成 21 年 9 月～平成 23 年 2 月

### (3) 調査方法及び分析方法

#### ①模擬保育実践（1 年次 11 月実施）

5～6 人で 20 分程度の活動を立案し、保育者役・幼児役・観察者に分かれて実践・参加・観察した（各学生 8 回経験）。

分析は、模擬保育実施直後に記入したワークシート記述を KJ 法によって分類し、検証した。また、全取組後に模擬保育後調査を実施し、保育者役の経験の有無による差異を分析した。同様に、模擬保育前後において保育実践力に関する実習自己評価調査（1 年次 9 月保育実習 I 及び 1 年次 2 月保育実習 II 終了後）を実施し、模擬保育による学びの実際と即応力について統計学的に比較検討した。

#### ②模擬保育 VTR を活用したビデオカンファレンス（1 年次 12 月実施）

模擬保育の様子をビデオカメラで収録し、ビデオカンファレンス教材として活用した。場面見本法によってビデオ分析し、子ども役の姿に焦点を当てた映像を 2 本抽出し、視聴した際の気づき・カンファレンス後の気づきを分析対象とした。

分析は、各記述を KJ 法で分類し、模擬保育実施直後の記述内容の比較から、模擬保育実施直後・保育映像視聴直後・カンファレンス直後の気づきの推移を検証した。また、ビデオカンファレンス実施後調査を実施し、学びの実際と見とり力について統計学的に分析した。

#### ③VTR stop 省察法（2 年次 10 月実施）

3・4・5 歳児の保育実践に関する映像を用いて、計 3 回実施した（平成 21 年度に予備調査実施済み）。保育実践場面の映像を提示し、抽出児に対して保育者の援助が求められる場面で映像を静止し、場面における気づきと自分自身の援助について記述を求めた。その後、仲間との話し合い終了後の意識変容を

記述した上で VTR の続きを再視聴し、その後子どもや保育者の姿から視聴前後における自分の考えを比較するよう促した。

分析は、ワークシート記述を KJ 法によって分類・分析すると同時に、前年度の予備調査で得た指標に基づいた全取組後の質問紙調査を実施し、統計学的に検証した。視聴覚教材は、岩波映像「幼児とのかかわりを考える」から、3・4・5 歳児の保育実践映像の中で保育者が子どもに即応することが求められる場面を抽出し、活用した。

#### ④遊び考案法（2 年次 1 月実施）

手遊び・ふれあい遊び・運動遊びの計 3 回を実施した（平成 21 年度に予備調査実施済み）。VTR 視聴後、2 年間の最終実習（2 年次 9 月教育実習 II）で担当した子どもの年齢別グループで集まり、発達過程・遊びの様子・興味など子どもの実態について共通認識を持った後、6～8 小節の楽曲のフレーズのみを聴き、対象年齢の子どもに応じた遊びのイメージを膨らますよう促した。その後、話し合いながら歌詞や動きを加えて子どもたちにふさわしい遊びを考案し、実演発表をして他の仲間から意見を聴く機会を設けた。最後に、同じ楽曲を用いた研究者考案の遊びを実践すると同時に、遊び考案に関する気づきについて記述を求めた。

分析は、前年度の予備調査で得られた指標に基づき、個人想像段階・仲間との協同考案段階・全体に関する質問紙調査を実施し、統計学的に検証した。また、ワークシート記述と質問紙調査の自由記述内容を KJ 法で分類して検証した。なお、視聴覚教材は、現職保育者の協力を経て研究者が独自に考案したオリジナル歌を活用した。楽曲は DTM によって WAV ファイルとしてデータ化し、楽曲 CD として繰り返し視聴してイメージを膨らませることができるよう配慮した。

## 4. 研究成果

### (1) 模擬保育実践

実施した模擬保育（全 32 回）直後の記述を分析した結果、実践者を経験した学生は、「子どもの行動」「保育者の援助」「活動自体の良さや課題」に着目する傾向が見られ、活動を振り返り子ども役の行動や保育者役としての自分自身の援助の在り方を模索したり、新たな課題を発見したりすることが多かった。また、参加者を経験した学生は、「子

どもの心情推測」に関する記述が多く、実際に子ども役として参加することで活動の楽しさや分かりやすさ・保育者役とのやりとりを通した心情など、実体験に基づいて感じた学びが大きかったことが大変意義深い。同様に、観察者を経験した学生は、「子どもの行動」「保育者の声かけ」の双方に着目する傾向があり、客観的視点から保育を観察する際に、子ども役の行為や表情に関する保育者役の声かけの丁寧さ・分かりやすさなどに着目して学びを得る傾向が明らかになった。

また、全模擬保育後調査を分析した結果、「活動準備や環境構成の重要性の認識」「仲間のアイデアから得た学びの多様性」「保育活動を見つめ考察しようとする意識」などの得点が高かった。その反面、実践者としての「立案作成」「進める楽しさ」「予想外の対応」「抽出児の心情理解」などの得点が低かったことから、立案・保育実践に関する力量に関しては模擬保育の実践回数が少なかったこともあり、本取組だけでは有意性が見られなかったと考える。しかし、模擬保育実施による保育実践力向上の価値に関する得点は高かったことから、実際に模擬保育を体験することを通して机上では体感できない実践的な学びを得る可能性があり、今後このような経験を継続することで即応力の向上が期待できると考えられる。また、保育者役を経験した学生は保育者への志望意欲が高まり、実習後には自己課題がより明確になると同時に、場面に応じた子どもの心情を理解できるようになったことも示唆された。

同様に、模擬保育実施前後の実習自己評価を比較分析した結果、模擬保育実施後には「場面による子どもの心情理解」「見通しを持った保育展開」「柔軟的対応」「実践における課題点」などの得点に有意性が見られ、全 8 回の模擬保育経験前後における実習では、子ども理解・実践・省察などに関する保育実践力の向上が見出された。

以上の結果から、学生が主体となって模擬保育を実施・体験することは、実際の子どもの立場に立って活動に参加することで子どもの心情の理解を可能にする効果があると同時に、実習場面における柔軟な即応力・見通しを立てた保育の実践及び展開をする実践力を向上させる上で有効である反面、継続して実践回数を積み重ねていく必要性が示唆された。

## (2) 模擬保育VTRを活用したビデオカンファレンス

模擬保育直後・ビデオ視聴後・カンファレンス直後の記述の推移を分析した結果、模擬保育直後とビデオ視聴後の記述の推移には大きな差異が見出されなかったが、カンファレンス後は「子どもの内面推測」に関する記述が有意に多かったことが明らかになった。特にビデオ視聴直後は「保育者の声かけ」「保育者の援助」「子どもの内面推測」が多かったが、カンファレンスを重ねる中で「保育者の声かけを受けて子どもはどう感じたか」「子どもの表情から何を感じ取れるか」という語り合いに発展し、子どもの心情を深く読み解こうとする見とりに基づいた省察プロセスが見出された。無論、本取組において抽出児役に焦点を当てたビデオ映像を活用したことも要因として考えられるが、未体験の保育ではなく実際に自身が体験及び観察した保育を改めて見つめ返すという要因も大きいと考えられる。すなわち、当時の保育の流れや様子を振り返りながら、自分が気づけなかった保育者や子どもの一見さりげない行為や、そこに起きた出来事の意味を一つ一つ丁寧に考え解釈する姿勢の構築を可能にすると言えるであろう。

また、質問紙調査を分析した結果、ビデオカンファレンスによる「保育者の援助の良さ」「子どもの心情理解」「客観的視点からの省察」の得点が高かったことから、改めて再生されたVTRを手掛かりに、保育者役の保育実践の援助に関する良さや課題を見出すことや、抽出児役の子どもの心情を理解することができるようになったと考えられる。同時に、客観的視点から再度自身が経験した保育を見直すことによって、模擬保育体験時には気づけなかった発見が得られ、省察の重要性を喚起するに至ったと考えられる。

同様に、自由記述を分析した結果、ビデオ映像による「気づきの拡がり」「客観的視点の獲得」、カンファレンスによる「仲間の考え方の獲得」「保育の捉え方の拡がり」「子どもの心情理解」が見出されたことから、自分自身が体験した映像を再視聴することで、新たに得られた発見や見落としていた事象の気づきを得られ、実践をそのままにせず再度省察することの意義を理解するに至ったと考える。同様に、カンファレンスを通して、子どもや保育者の目線で見えて感情移入する

中で改めて感じたり、他者の考えを聴くことで自分自身では気づけなかった発見ができたという結果が得られた。この再視聴という効果は本取組特有の効果であり、保育を見つめる観察眼を養うだけでなく、洞察力・推察力を培う一助として有効であると考える。

## (3) VTR stop 省察法

VTR 視聴後の気づきに関する記述と学生自身の援助を分析した。その結果、視聴直後は全般的に子どもに着目した記述が多く、特に子どもの行動・表情を手掛かりにした「子どもの内面推測」に関する記述が有意に多かった。予備調査段階ではTVを活用して実施したが映像の細部の認識が難しかったため、本調査では活用したプロジェクター及びスクリーンも子どもの実態の細部認識を可能にした効果として考えられる。また、学生自身の援助に関しては、子どもの心情に沿った共感的な応答や他児との仲立ちなどの援助を考える学生が有意に多かった。これらの結果から、VTR 視聴によって子どもの内面を見とり、心情に即した援助を導き出すプロセスが構築しやすいことが示唆された。

また、質問紙調査結果からは、文章による事例検討よりもVTRの方が事象を的確に把握できることや、特に視聴直後の話し合いによって子どもの内面や事象の見方が拡がり、互いの気づきを更に喚起しながら省察を深めて子どもを多面的に理解することが可能であることが見出された。同時に、視聴覚教材の映像は保育の流れを掴みやすく分かりやすいこと、視聴した子どもの行動から内面を推測することが可能であることが明らかになった。また、仲間と話し合うことで子どもの心情に関する気づきを更に拡げると同時に、内面に関する自分自身の気づき不足を認識できるという結果が得られた。よって、見とり力向上のためには、少人数の仲間との協同的な学びの場を設ける必要性や自らの省察に関する課題を自覚する重要性が示唆された。

## (4) 遊び考案法

全取組実施後の質問紙調査を分析した結果、遊びを考案する際に音楽素材を手掛かりとすることは、対象の子どもの姿や思いを想起しながら考案しやすく、創意工夫を凝らしたり発想力を拡げたりしながら即応力を高めていく一助となることが見出された。

また、考案段階における他者との話し合いや学生間の相互発表の効果が見られたことから、互いに子どもの姿や興味関心という原点に立ち返るプロセスの中で、仲間との協同的な学び合いが生まれると考えられる。同様に、子ども理解を中心とした保育を実践する上で、遊びを創る際に求められる発想力・創意工夫などの重要性を認識し、子どもの姿を出発点とした思考プロセスの基盤を構築するに至ると考える。また、他者のアイデアを参考にしたり吸収したりすることで遊びの幅の広がりが生まれ、保育現場での適応可能性につながると考えられる。

その反面、研究者創作遊びに対する実践意欲や仲間のアイデアを吸収する意欲など、自分自身で考案したものよりも他者が考案したものに対する実践意欲も高かった。むしろ、自身が創作した遊びは、「子どもたちの反応が良いか自信が持てない」など手応えを感じられず、現実的に即応しているのか否かを意識する傾向があると考えられる。

また記述分析結果から、「遊びの幅の広がり」「創作プロセスの楽しさ」「発想の転換」「遊びの意義の理解」などの記述が得られた。特に遊びの幅に関しては、既存の遊びを展開することが主たる目的ではなく、その時々の子どもの姿に応じて発想を転換して保育実践をするという考え方の基礎や姿勢の構築が見出された。

#### (5) 総合的結果

以上の結果から、保育者養成段階における保育実践力向上のために視聴覚教材を有効的に活用することは、原点である「子ども理解の深化」と子どもや保育実践そのものを見つめ問うていく「省察プロセスの体得」の意識づけを可能にすると同時に、子ども理解を基盤とした見とり力・即応力の力量形成につながることが見出された。また、少人数の仲間との協同的な学び合いが自分自身の保育の見方や枠組みを捉え直す大きな契機となり、仲間との互惠的な学びが新たな見とり力・即応力の向上につながることが示唆された。その反面、本取組は限定された回数の実施ではなく、継続的に繰り返し実施することでより大きな効果が得られることが期待できる。今後は、本取組の定期的な実施による効果について更なる検証を重ねていきたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

上村晶 「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察」『高田短期大学紀要』第30号 2012年3月1日刊行予定

〔学会発表〕(計 2 件)

上村晶 学生の保育実践力向上を目指して—視聴覚教材を活用して— 日本保育学会第63回大会 2010年5月23日 松山東雲女子大学

上村晶 学生の保育実践力と模擬保育の関連性 日本発達心理学会第22回大会 2011年3月26日 東京学芸大学

〔図書〕(計 0 件)

〔その他〕なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

上村 晶 ( UEMURA AKI )

高田短期大学 子ども学科 助教

研究者番号：60552594

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし